

クマザサ

さ さ 小竹の葉は み山もさやに 乱げども
いも き われは妹思ふ 別れ来ぬれば 柿本人麻呂

柿本人麻呂が赴任先の石見国から大和へ戻るときに、石見に残して来た現地妻を詠んだ有名な相聞歌である。「別れた妻のことばかり思って山道を歩いていた。ふと気づくとさやさやと風にざわめく笹の音がする。この美しい山ともお別れなのだなあ」。音の無から有、美の妻から山への変化が見事に描かれている。

笹は竹と同じくイネ科に属する植物で、小ぶりの竹を指している。万葉集には竹の歌も出てくるので、この小竹はクマザサなのであろう。クマザサの生える所に熊が生息し、それを餌にしている所から熊笹と命名されたという説もあるが、クマザサの葉は冬になるとへりに白い縁取り（隈）が現れるので、「隈笹」が本来の名前である。

ちなみに隈が熊に変わった故事をひとつご紹介しよう。古代、クマ（隈）とは蔭、心の闇、汚れあるいは罪のことを意味していた。古代叙事詩『秀真伝』によると、素盞鳴尊は幼少の頃、癩癩を起すすと泣きわめく手のつけられない子供であった。いたずら盛りには早苗が出揃った苗代にもう一度稲種を撒き散らし、民を困らせたことがあった。母親の伊弉冉尊は、こんな子供にしたのは、生理のときに夫と交わったためであると思い込み、世間に迷惑をかけた隈を自ら引き受けて民に償いをするとともに、自分や我が子だけでなく、民の隈をも清めようと「隈の宮」を建立したのである。それが現在の熊野神社である。

その『秀真伝』に、天照大神の岩戸隠れの時の神事が書かれている。鈿女命らにヒカゲノカズラを櫛にして、茅卷矛を持たせた。そしてオケラを炊いて庭火とし、笹の葉で湯立てをしている。神事にヒカゲノカズラ、オケラ、笹は欠かせないものなのである。クマザサはいわば隈を清める笹とも言える。

ところで熊は雑食で、春の新芽、アリや蜂の幼虫、秋の木の実、鮭や鹿の肉などを餌にするが、結構甘いものも好きで、蜂蜜、スイカ、柿の実、生ゴミ（アイスクリーム）の味を覚えると人里にやって来る。春はクマザサの若芽も餌にするが、秋は冬眠に備えてクマザサの葉を沢山食べ、消化管に入った食物が腐らないようしている。

クマザサの葉には安息香酸が含まれ、殺菌・防腐作用があるため、粽や笹餅、笹寿司、笹漬けに用いられている。また葉には葉緑素、リグニン、バンフォリン、鉄、カルシウム、ビタミンC、K、B₁、B₂などが含まれ、組織修復作用があり、胃潰瘍や胃炎、歯槽膿漏、口内炎、切り傷などに効果がある。近年、バンフォリンに免疫賦活作用や制ガン作用があることが報告されている。

クマザサは他の笹や竹と同様、数十年から百二十年の間隔で一斉に開花する時がある。一生に一度しか花は咲かない。したがって実も一気に増え、それに伴い野鼠も大量発生する。熊も大喜びであろう。ところが秋に実を落とした後、親の笹は枯れて死んでしまうのである。クマザサが無くなれば熊も移動せざるを得なくなる。一斉開花はまるでバブルのようである。バブルは弾けるようになっている。バブルを経験した某国が亡国の歩みを進めているのと同じである。しかし心配には及ばない。結実を鼠や熊に食い荒らされたとしても、時間はかかるが、残った種はやがて芽吹き、また美しい山にクマザサの群棲地が出現するはずである。

（山人）

まきまき
ま